

群 教 セ	F09 - 01
	平17.225集

不登校を予防する 小・中学校連携モデルの提案

—— 中1不登校問題に視点を当てて ——

長期研修員 中山 喜和子

《 研究の概要 》

本研究は、中1不登校を予防するために小・中学校でどのように連携して中学校適応支援を行うかを研究したものである。調査から、既に入学前から不安を抱えた小6、入学後は小・中の違いに戸惑い、さらにその違いを乗り越えられずに悩む中1がいる実態をつかんだ。そこで不登校の早期発見と初期対応に必要な個人情報を小・中で共有する情報交換会のもち方、及び実態に合った中学校適応支援を小・中で連携して行うモデル案を提示した。

キーワード 【教育相談 中1不登校 個人情報 小・中連携 情報交換会 適応支援】

I 主題設定の理由

全国の小・中学生の不登校児童生徒数はここ数年減少傾向であるが、依然として13万人を超え、特に中学生の不登校生徒数は小学生の約5倍に増加している。中でも中学校1年生（以下「中1」）は小学校6年生（以下「小6」）の約3倍に上り、学年が上がるごとに増加していく傾向にある（文部科学省「学校基本調査」）。群馬県の不登校児童生徒数はここ2年ほど減少傾向が見られたが、平成16年度には増加に転じた。中1の不登校生徒数も他県と同様に大幅な増加が見られる。

多くの中1は自然に小学校と中学校（以下「小・中」）の違いを受け入れて適応していくが、中には適応できずに不登校状態になる生徒もいる。このような中学校進学に伴う不登校（中1不登校）を防止するには、早期発見と的確な初期対応、また関係小・中による児童生徒の実態に合った段階的支援が必要である。生徒が小・中の違いを乗り越え、充実した中学校生活を送るために、関係小・中の教員が連携して生徒を支える支援の在り方を提案することは意義あることと考える。

II 研究のねらい

不適応状態に陥る中1は、中学校生活のどんなことにつまずき、乗り越えられないのだろうか。生徒に不適応感を感じさせる中学校の「心理的な壁」とは何だろうか。児童生徒から見た小・中の違いを明らかにした上で、新しい生活への適応に

必要な支援を考えたい。また不登校の早期発見や初期対応のために、中学校側が小学校側の蓄積された情報を生かせるような支援も考えたい。

III 研究の見通し

課題1 中学校の「心理的な壁」とは

(1) 小6の中学校に対する期待や不安

入学前の小6は、中学校に対して何を期待し、何が不安なのだろうか。負のイメージが強い場合、前向きな中学校生活を始める「壁」になる。この期待や不安の傾向を明らかにするために、小6に対して中学校についての聞き取り調査を行う。その調査内容を、小学校段階から中学校生活適応支援を行うための資料とする。

(2) 中1のつまずき

中学校は、学習形態や内容だけでなく、教員との関係、部活参加による上下関係、ほかの小学校からの生徒とのかかわりなど、小学校とは質的に異なる部分が多い。これらの小・中の違いに対し、多くの生徒は時間が経つにつれて自分なりの解決策を身に付けるが、中には解決策を見いだせずに不適応状態になり、不登校に発展する例がある。

そこで中1に対してアンケート調査を行い、どんなことにつまずいたり悩んだりするのかを把握し、実態に合った適応支援を考える資料とする。

課題2 中学校適応のための情報内容とは

(1) 小・中の指導上の観点の違いを踏まえた情報

小学校と中学校には、児童生徒の発達課題に応

じた異なる支援がある。小学生には発達の個人差や家庭の養育態度を考慮した支援が必要であり、一方中学生には集団の中での個性の伸長を目指した支援が求められる。そのため小学校と中学校の教員の、児童生徒を見取る観点が違うのは当然であると考えられる。群馬県は、小・中両校種の勤務経験のある教員が比較的多く、お互いの学校事情をある程度は理解していると思われるが、この観点の違いをアンケートで比較することで、小6が進学先の中学校に適応するために必要な情報を明確化するとともに、小・中の支援の在り方を考える資料とする。

(2) 中学校側が必要な情報と、小学校側が伝えたい情報

小学校を卒業したばかりの生徒から見れば、中学校は教員の支援方法が異なる上、人間関係の変化も大きい。生徒を新しい環境に適応させる支援には、小学校卒業時の状態だけでなく、背景や指導過程の情報も必要である。小・中それぞれの教員が重視する情報を比較することで、必要な情報を明確化したい。

課題3 必要な情報を小・中で送り合う方法とは

(1) 不登校早期発見のための共通認識

児童生徒が急に不登校状態になるということは少なく、ほとんどは何らかの前兆があると考えられる。入学直後の中1不登校は、小学生時代の欠席日数や学校生活の様子などの情報から早期発見が可能であるという共通認識のもとで、小・中が連携していく方法を考える。

(2) 小・中の情報連携の在り方

中学校側の早期の生徒理解を助け、不登校の前兆を早期に発見し、効果的な対応をするためには、入学後も必要な情報を小・中で交換し合えるような連携が必要になる。

そのために効果的な「小・中情報交換会」の持ち方や、必要な情報を共有するための「申し送りカード」を作成し提案する。さらに適切な情報交換会の時期や回数の検討も行う。

(3) 個人情報はどう扱うか

中学校に申し送る児童生徒の個人情報は生育歴から特技まで様々であるが、「申し送りカード」の記載項目は、不登校などの学校不適応の早期発見と初期対応に必要な項目を中心としたい。さらに小学校側の教員が抵抗なく書き込める情報、小学校側が口頭で報告し中学校側が記入する必要の

ある情報といった個人情報の扱い方についても明らかにし、カードの目的や生徒の成長を考えて、処分時期も検討する。

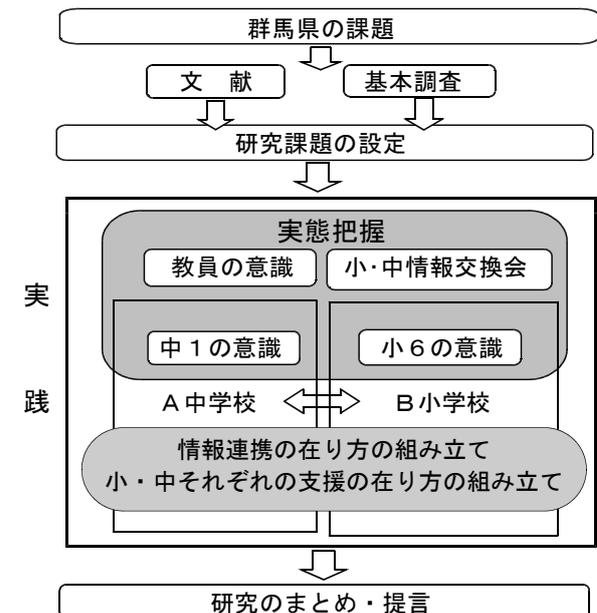
課題4 小・中の実態に合ったそれぞれの支援とは

中学校への適応を高めるためには、小学校からの児童生徒の実態に応じた支援が必要になる。

小学校段階では、中学校に対する心理的不安を軽減することを目的とし、実態に応じた進学ガイダンスなどの具体的な支援を組むことで「中学校に進学するのが楽しみ」「心配はあるけれど、中学校にも支えになってくれる人がいる」などの認識をもたせたい。また、中学校段階では、早期から適応支援を開始することを目的とし、関係教員が入学してくる生徒の全体的な傾向と個人の実態を把握した上で受け入れ体制を作り、特に学級・部活などの人間関係づくりを充実させたい。

これらの支援を、研究協力校教員と共に組み立てたい。

IV 研究の計画



V 不登校理解に必要な共通認識(先行研究から)

「中1不登校生徒調査」(国立教育政策研究所2003)では、不登校を小学校4年～6年の状況で「不登校相当(欠席日数+保健室等登校日数+(遅刻早退日数÷2)=30日以上)」「準不登校(欠席日数+保健室等登校日数+(遅刻早退日数÷2)=15日以上30日未満)」に分類をしている。また、登校しているが教室以外で多くの時間を過ごすのは「非在宅校内型不登

校」とし、隠れた不登校として認識するべきである(石川瞭子 2002)という考えもある。

不登校は、一般には「1年間に病気や経済的理由等以外の欠席日数が30日を超えた状態」をいうが、登校しても遅刻や早退が多かったり学級以外で過ごす時間が多かったりする児童生徒も学校に適應していない状態ととらえ、「準不登校」として留意すべきである。このように小学校時代の欠席日数のほか、遅刻や保健室の利用状態の把握も、中1不登校を早期発見する情報として重要である。

VI 研究の内容

1 アンケート調査について

(1) 県内小・中学校教員に対して 【別紙資料1】

ア 対象 88名(回答率99%)

小・中学校置籍長期研修員36名、教育相談グループ特別研修員16名、関係小・中学校教員(A中学校22名、B小学校14名)の回答があった。

イ 目的 県内の小・中学校教員が行っている不登校児童生徒への支援の実態、また県内各地の小学校卒業生に関する情報交換会(「小・中情報交換会」)の実態を把握する。

ウ 形式、内容、時期(8月)

アンケート用紙は小・中別に作成した。1枚目は、小・中共に各校の不登校に対する指導や小・中連携についての実態及び各自の考え、2枚目は、各校の小・中情報交換会の実態及び各自の考え、さらに中学校教員用には各校の小学校からの情報の処理方法についての項目を加えた。

(2) 中学校1年生に対して 【別紙資料2】

ア 対象 A中学校1年生142名(回答率100%)

イ 目的 中1が入学した直後に感じた小学校と中学校の違いや戸惑い、また解決できずに現在も困っていることを具体的に把握する。

ウ 形式、内容、時期(10月)

①「小・中のちがいを」②「困ったり戸惑ったりしたこと」を各3つまで③「②をどのように解決したか」の3項目について記入するアンケート用紙を作成し、実施した。

2 聞き取り調査について

(1) 対象 B小学校6年生66名(実施率99%)

(2) 目的 小6が、中学校に対してどのような期待や不安をもっているかを具体的に把握する。

(3) 内容、方法、時期(10~11月)

質問紙ではうまく言語表現できない可能性のある児童の実態を考え、聞き取り調査とした。

①中学生になるのは「楽しみ」「不安」「いや」のどれに近いのか②なぜ「楽しみ(不安・いや)」なのか③中学校について知っていること④中学校について家族や友達と話すことの4項目を中心に、個別に一人8分程度の聞き取りを行った。

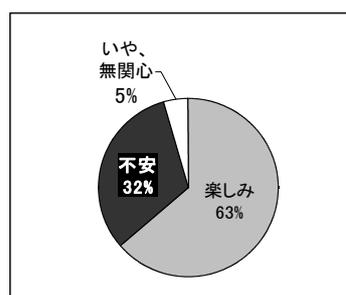
3 アンケート・聞き取り調査の結果と考察

中学校の「心理的な壁」とは

(1) 小6の中学校に対する期待や不安

聞き取り調査によると、多くの児童が中学校入学を「楽しみ」と答えているが、3分の1以上が不安や抵抗感を示している(図1)。さらに兄姉がいる児童は比較的「楽しみ」と答える割合が高いが、きょうだいがいない児童は「不安」「いや・無関心」の割合が高い(図2)。

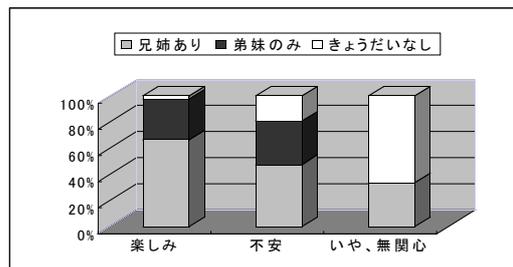
図1 中学校生活への期待①



注：B小学校6年生 66名

不安の理由については、「先輩や同級生からのいじめ」「勉強についていけないかもしれない」など、人間関係や学習についてあげる児童が多い。

図2 中学校生活への期待②

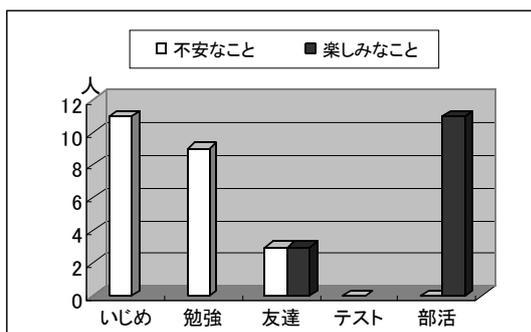


注：B小学校6年生 66名

一方、楽しみ群も不安群も「部活が楽しみ」という児童は大変多い。さらに友人関係では、新たな出会いを楽しみにしている反面、「友達ができなかったらいやだ」という不安も見える(図3)。

これらのことから小6は、部活への期待が高いものの、学習や人間関係には漠然とした不安を抱えていると考えられる。これらの不安を和らげる

図3 中学校生活で不安なこと、楽しみなこと



注：B小学校6年生不安群 21名(複数回答)

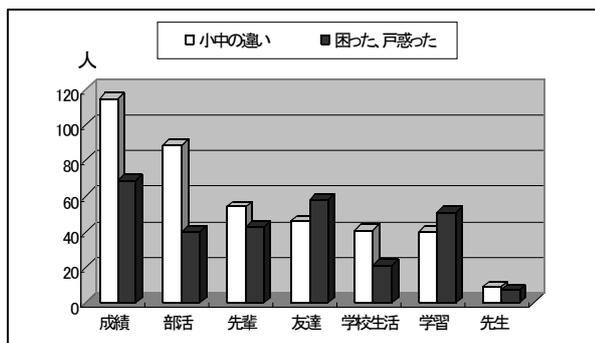
支援を小学校から行き、前向きな気持ちで進学することで中学校入学後の適応を高めることができると考えられる。

また、不安感の高い児童に対しては、小学校側で十分に把握して中学校側に伝達し、注意を払って見守る配慮が必要である。

(2) 中1のつまづき

10月に行ったアンケートで、入学直後に感じた小・中の違いと、入学後どんなことに困ったり戸惑ったりしたかを聞いたところ、「成績」「部活」などは入学直後の驚きは大きいものの、学校生活に慣れるに従って戸惑いは減少していく。しかし「友達関係」「学習」などは逆に戸惑いが増加していく(図4)。

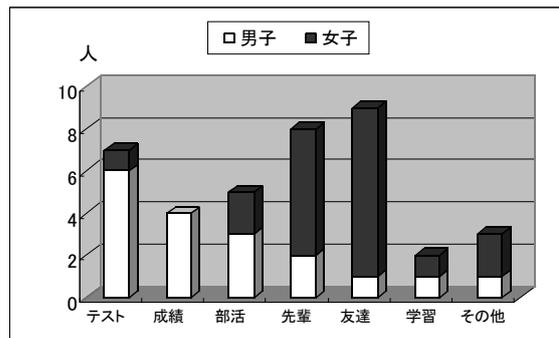
図4 小中の違い、困った・戸惑ったこと



注：A中学校1年生 142名(複数回答)

困ったことの解決方法は、慣れる・従う(27名)、自分で解決(147)、教えてもらおう(24)、助けてもらおう(6)であり、多くの生徒は自分なりに解決策を見付けている。一方で19%の生徒が未解決状態であると答えている。解決できずに困っていることについては男女差が見られ、男子は定期テストや成績などの『評価・学習』、女子は部活動の先輩や友人との『交友関係』が多い(図5)。また解決の際の援助者は、先生(8名)、友達(6)、先輩

図5 解決できなかったこと



注：A中学校1年生 27名(複数回答)

(6)、家族(5)、不明(2)であり、先生以外にも援助者を求めていることが分かる。

中1の心理状態は、入学直後に感じる驚きや戸惑いの段階から、しばらくして解決方法を見付けられなくなってきた段階へと変化すること、さらに男女差も見られることが分かり、それぞれに支援が必要であると考えられる。

(3) 調査から見た、3つの「心理的な壁」

小6の3分の1以上が中学校生活に対して漠然とした不安を抱えている事実から、入学前から既に「不安の壁」があり、また入学直後には小・中の違いに直面した驚きからくる「とまどいの壁」、さらに入学後しばらくして自力で解決できない事態になった時の「なやみの壁」ともいべきものがあると考えられる。さらに『評価・学習』『交友関係』は、中学校進学における大きな課題であることも明らかになった。

それぞれの心理的な壁は児童生徒にとって危機であり、不登校のきっかけになることが考えられる。これらの実態を踏まえて、小・中共に時期や個に応じた支援を行う必要があるといえよう。

中学校適応のための情報内容とは

(1) 小・中の指導上の観点の違いを踏まえた情報

アンケートによると、中学校は小・中の生徒指導の違いを大きく感じ、特に基本的な生活習慣の定着を小学校に求めている(資料1)。

資料1 小・中の意識の違い(中学校) 抜粋

- ・小中、男女で「大変な子」と感じる視点が違う。
- ・小は子どものプラス面、中はマイナス面を見る。
- ・小中の生活指導の差が大きすぎる。
- ・小での服装、髪型などは自由すぎる。そういう点は、中学校では注意されるので気になる。
- ・挨拶、返事、話を聞く態度は徹底させたい。
- ・不登校の原因は、小学校時代に作られていることが多い。
- ・小中の間にプライドの壁がある。
- ・卒業させたら関係ないという小の態度はよくない。

小学校は個に応じた段階的指導を中学校でも継続して欲しいと求めている（資料2）。

資料2 小・中の意識の違い(小学校) 抜粋

- ・生徒指導の視点が違う。
- ・進学後、急に2, 3ステップも変わってしまう。
- ・中は、問題につながる要素を知りたがっている。
- ・中はもっとひとりひとりに気を配れば、非行や不登校にそまらないのに。
- ・お互いが責任のなすり合いをしていないか。
- ・小は中で悪くなったと言ひ、中は小に問題の芽があったと言ひ。

同じ児童生徒を引き継いで指導をしていくには、小・中の指導方針の違いを認め合い、お互いに必要な情報を効率よく交換し合うような情報交換会を計画していく必要がある。

(2) 中学校側が必要な情報と小学校側が伝えたい情報

アンケートによると、小・中共に「交友関係」「特徴ある行動・性格」「家庭環境」を重視するが、中学校の方が「交友関係」を重視する傾向にある。また中学校は「欠席に関すること」について関心が高い反面、小学校は「指導経過や配慮事項」を重視している。

したがって、この違いを意識しながら情報交換し、小学校は中学校が必要とする情報を整理して伝えることが必要である。

(3) 中学校での適応支援を支える情報

小学校側の入学前の事前指導は「学習習慣」を最重要視し「友人関係」「生活習慣」と続く。一方中学校の入学後指導は「クラス」「生活習慣」「きまり」など、主に学校生活への適応を意識したものになっており、学習習慣への意識については小・中で違いが見られる。また既に述べたように、中1の入学直後の驚きからくる戸惑いが「成績」「部活」などから、次第に自力で解決しにくい「交友関係」「学習」などに移る事実（図4、図5）から考えると、中1への適応支援は時期によって内容を変えていく必要があり、それを支える小学校側の情報は卒業時の事実だけでなく、児童生徒の背景や効果的だった支援に関する情報なども必要であると考えられる。

必要な情報を小・中で送り合う方法とは

(1) 情報連携についての実態

ア 小・中情報交換会の必要性と課題

アンケートでは、ほとんどの回答者が小・中情

報交換会の必要性と重要性を述べている。しかし中学校側は、より多くの情報を求めながらも、小学校側の提供する情報の客観性に疑問をもつ意見もある（資料3）。

また「細かい情報が欲しいのに会議の時間が短い」「忙しい時期で資料作りが大変」などの声から、情報交換会の時期が現場にとってやや無理な設定であることがうかがわれる。さらに小学校側には「児童の情報が新担任にきちんと伝わっていないのではないか」という不安がある（資料4）。中学校側は、小学校側からの情報を学校として受け取り、活用することが望まれる。

資料3 小・中情報交換会について(中) 抜粋

- ・小は忙しさを冷静になれない場合もある。
- ・小は、自分の学級のことを出したがらない。
- ・教師の姿勢で、交換会の価値がすごく変わる。
- ・交換された情報は有効でないものもある。
- ・小で問題がなくても、中でデビューする子がいるので、一人一人の情報が欲しい。
- ・的確、生の情報が欲しい。
- ・複数回必要。

資料4 小・中情報交換会について(小) 抜粋

- ・卒業後、子どもの情報が旧担任に入っていない。
- ・情報が、中の新担任に伝わっていなかった。
- ・小での積み重ねた指導を、中がきちんと引き継いでくれるのかという不安、不信。
- ・資料を作るには忙しい時期で、十分な情報交換ができない。
- ・児童数が多くて、時間が足りない。
- ・中は、知りたいことを明確に打ち出してよい。
- ・文章にして残せないことがけっこう重要。
- ・中に先入観を持たせたくない。
- ・入学後、もう一度情報交換会が開けるとよい。

イ 県内の小・中情報交換会の様子

アンケート（回答：中学校16校、小学校26校）から分かる県内各校で行われている平均的な小・中情報交換会は、次頁表1のとおりである。

小・中情報交換会が1回のみ実施の場合は、小学校側の提示資料が大変重要になるが、会の設定が小学校の卒業式前後であることから、小学校側の負担が大きい。

一方2回実施の場合（小学校1校、中学校2校）は、中学校側の情報も交換されるので入学後の生徒理解が深まり、適応が難しい生徒の支援に必要な双方向の情報交換が可能になる。実際に生徒の適応支援には、情報交換会の複数回実施が必要とする意見は、小・中共に多い（資料3、資料4）。

これらのことから、情報交換会を複数回持つことで小・中の信頼感と情報連携は深まり、中1不

表1 アンケートによる県内の平均的な「小・中情報交換会」の持ち方(まとめ)

項目	実施が1校あたり 1回 の場合 (93%)	実施が1校あたり 2回 の場合 (7%)
参加者	中学校側：中3担任(特学担任)(養護教諭)(生徒指導主事) 小学校側：小6担任(特学担任)(養護教諭)	
所要時間	1校あたり 合計2～3時間	
時期	小学校卒業式前後	1回目：小学校卒業式前後 2回目：中学入学後、1学期か2学期
持参資料	中学校側：なし 小学校側：学級編成資料 指導要録写し (保健関係資料)(その他資料)	中学校側：2回目：入学後の学力や欠席の資料 小学校側：1回目：学級編成資料 指導要録写し (保健関係資料)

注：() 内は、参加(持参)したりしなかったりした参加者や資料を示す。

登校への初期対応はしやすくなると言える。

ウ 情報交換会以外の交流の必要性

情報交換会以外にも「小学校を授業参観したい」「入学後も連絡し合いたい」「小・中合同行事を」「関係小・中連絡会を」などの連携の必要性を述べる意見は非常に多い。共通の児童生徒を支援していくためには、小・中の教員共に情報交換会以外の交流の必要性を実感していると考えられる。

(2) 児童生徒の個人情報の扱い

アンケートによると、書面に児童生徒の個人情報を記載することについては「どんなことでもよい」から「すべてよくない」まで様々な意見があり、小・中の差もあまり見られないが、小学校側の方が情報を慎重に扱う意識が強い傾向がある。

「学力」「欠席日数」「遅刻早退」「欠席理由」などは指導要録同様に書面でよいとする回答が多く、「別室登校」「保健室利用」「家庭環境」「病歴」「長欠きっかけ」などはやや抵抗があり、情報の扱いに配慮が必要である。また「交友関係」は中学校側が特に重視する情報であるが、口頭での伝達が望ましいであろう。

このように「申し送りカード」作成には、情報を送る小学校側の抵抗をなくす配慮と、受け取る中学校側が必要とする情報内容に応じた記載内容と形式を工夫することが求められる。

4 小・中情報交換会をどう組み立てるか

(1) 情報交換会の活性化に必要な条件

アンケートで明らかになった小・中情報交換会の活性化に必要な条件は、以下の4つである。

小・中情報交換会の活性化に必要な4条件

- ① 複数回の開催と、交換会以外の交流を行う。
- ② 小学校は必要とする情報の客観性に配慮する。
- ③ 中学校は情報を学校として受け、活用する。
- ④ 児童生徒を共通のイメージで理解する。

(2) 客観性と引継ぎに有効な「申し送りカード」

児童生徒を見る観点異なる小・中の教員同士で条件①～④を満たす情報交換会にするには、「申し送りカード」のような客観的資料を仲立ちとするのが効果的であり、これにより中学校側は受け取った情報を確実に新担任に引き継ぎ、対応に生かすことができると考えられる。

不登校の早期発見を確実にするには、小学校側は小6全員についてカード記入をするのが望ましい。そのために、カードの項目は担任が記入しやすく確実な情報のみを絞り込むこととする。

【別紙資料3】「申し送りカード」

【別紙資料4】「申し送りカード」記入方法と読みとり方法

(3) 小・中情報交換会で扱う項目

小・中情報交換会の活性化に必要な4条件及び先行研究から、不登校予防に必要な項目を以下の①～⑦に絞り、「申し送りカード」に盛り込んだ。

ア 不登校の早期発見のための情報

(学校への適応状態を客観的に示す情報)

① 欠席状況など

欠席が年間30日を超えなくても、遅刻・早退が目立つ場合や保健室登校(相談室登校なども含む)は学校不適応状態と見られる。また教育支援センター(適応指導教室)通級は指導要録上出席扱いになるため、申し送りする必要がある。

② ひんぱんな保健室利用(養護教諭の観察)

児童一人一人の様子を把握している養護教諭の目から見て、ケガや病気にかかわらず来室が目立つ場合は、教室に自分の居場所を見付けることができている場合がある。

③ 参加しなかった大きな行事

修学旅行や臨海学校、発表会などの大きな行事の不参加は、健康管理を含めて本人や本人を支える周囲に課題があると考えられる。

④ 学習面

極端な学力の低さや学習の偏りは、学校生活が負担になり学校不適応につながる可能性がある。

⑤ 交友関係

周囲から孤立しがちだったりトラブルが絶えなかったりする場合は、交友関係を継続するのが難しいため、学校不適応につながることもある。

イ 不登校の初期対応のための情報

(具体的な支援につながる情報)

⑥ 指導の工夫・配慮 (効果的だった支援)

中学校の新担任が具体的な支援 (言葉かけ、友人からの協力など) に生かしていく。

⑦ 趣味、特技、関心をもっていること

同様に、新担任などが本人とかかわりをもつきっかけや、本人を生かす場面づくりに役立てる。

不登校予防に必要な情報 7項目

ア 不登校の早期発見のための情報

- ① 欠席状況など
- ② 保健室利用状況
- ③ 大きな行事への参加状況
- ④ 学習面の特徴
- ⑤ 交友関係の特徴

イ 不登校の初期対応のための情報

- ⑥ 効果的だった指導の工夫・配慮
- ⑦ 趣味、特技、関心をもっていること

ウ 個人情報保護への配慮

軽度発達障害が考えられる場合や複雑な家庭環境、かつてトラブルがあった交友関係などは、口頭でエピソードを伝え、受け取る側がメモする。

また児童の発達を考えて小5～6年生時の情報を中心に伝え、カードの保存期間や最終的な廃棄方法などを検討し、適切な情報管理に努めたい。

(4) 複数回の実施が望まれる小・中情報交換会

既に述べたように、中1の中には、入学直後は「とまどいの壁」、入学後しばらくすると「なやみの壁」を経験し、それによって学校不適応状態に陥る生徒がいることが考えられる。それぞれの「壁」への対応を考えると、小・中情報交換会は2回持つことが効果的であると言える。

1回目は「とまどいの壁」対策として、申し送りカードなどを活用して全体的な情報を伝え (前年度3学期)、2回目は「なやみの壁」対策として、不適応状態の早期発見や効果的な初期対応の視点での情報交換を行う (本年度1学期)。

参加者については、小学校側は中学校側が必要とする情報を提供できる者、中学校側は小学校側の情報を関係教員に伝え活用できる者であることが必要である。

ア 第1回 小・中情報交換会案 (図6参照)

(ア) 参加者

多面的な情報提供と情報管理上、小学校側は担任のほかにも養護教諭、管理職なども参加するのが望ましい。中学校側は担当者 (複数) を決め、教育相談担当、養護教諭なども参加するのが望ましい。

(イ) 実施形態 全体的な視点で

① 準備資料 (小学校側中心)

「申し送りカード」 (全員分が望ましい)、学級編成資料、指導要録写しなど

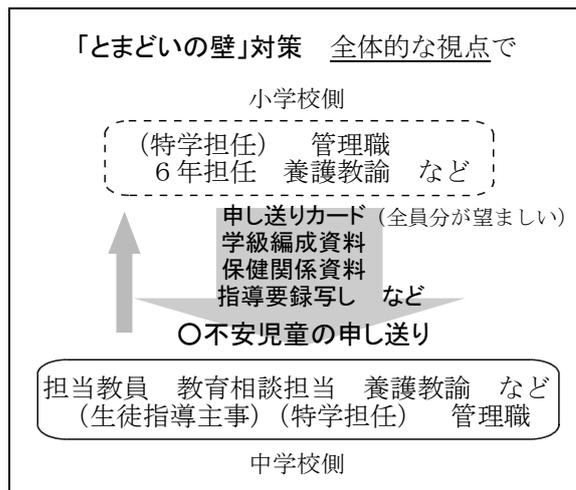
② 中学校側

全カードに目を通し、チェックがある児童を中心に小学校側から必要な情報を受け取り、カード裏面にメモする。担当者はカードをはじめ、ほかの情報を確実に新担任に渡す。

③ 小学校側

中学校生活に対して特に不安感が強い児童の様子を伝える。

図6 第1回 小・中情報交換会案 (前年度3学期)



イ 第2回 小・中情報交換会案 (図7参照)

(ア) 参加者

小学校側は、前年度情報交換会の出席者で異動のない教員は参加する。また生徒の適応状態により、中学校側は、欲しい情報の関係者参加を求めてもよい。【例：生徒指導主任、5年時の担任】

(イ) 実施形態 個の視点で

① 準備資料 (中学校側中心)

登校しぶりなど、不適応状態の生徒に関する資料 (現時点での欠席状況、成績、交友関係など)

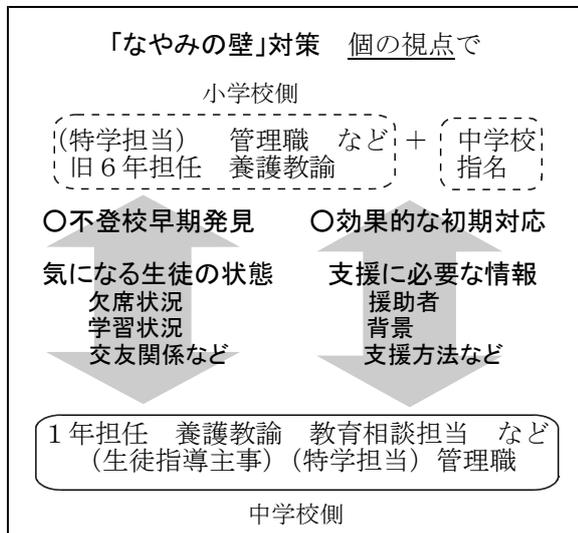
② 早期発見と初期対応

中学校側が現在気になる生徒についての情報交換、及び不適応状態の生徒に対する具体的な支援に役立つ情報交換

ウ 慣例への配慮

保健関係、特別支援関係は、担当者同士で独立して情報交換し合うのが慣例ならば、あえて変更する必要はないと考える。

図7 第2回 小・中情報交換会案(本年度1学期)



5 小・中学校連携モデルの提案

小・中の実態に合ったそれぞれの支援とは

中学校進学に伴う環境の変化は、全ての児童生徒が何らかの心理的な負担を感じる。そのため全体的な視点での支援(全員が対象)が必要である。

また中学校の「心理的な3つの壁」は、それぞれ質的に異なるだけでなく、これらの「壁」の高さの感じ方は児童生徒一人一人で異なる。小・中の教員はこの感じ方の違いを日常観察(気付き)やアンケートなどで確実に把握し、関係教員で共通理解した上で、個の視点での支援(適応が難しい児童生徒が対象)も必要である。

(1) 「不安の壁」対策

ア 実態把握(期待や不安)の必要性

小6の不安感はいじめはいやだけれど、部活は楽しみ」のように複雑である。そこで、中学校生活への不安感や抵抗感を和らげる支援だけでなく、楽しみなことを強調し期待感を高める支援の工夫が効果的であると考えられる。そのため、児童の実態を幅広く把握することが必要である。

イ 入学前の中学校生活ガイダンスの重要性

中学校についての知識が極端に少なかったり、噂などのあやふやな知識だけでは不安が高まりやすい。入学前に得られる正しい知識によって不安は和らぎ、期待も高まる。そこで小学校段階の全

体的な視点での支援を、学活などで設定する「中学校生活ガイダンス(仮称)」に集約して実施する。進学に対して不安の強い児童は、中学校に個の視点で見守るように重点的に申し送る。

ウ 中学校側との連携

中1アンケートによると、困ったことは自力解決している生徒の割合が高いのが実態である。しかし不安感が強い小6児童には、自力解決を促すよりも解決方法の例や援助者の存在を知らせることの方が効果的であると考えられる。そこで先輩中学生の体験談や援助者である中学校の先生などに直接ふれる体験が効果的であると言える。

(2) 不安を和らげ、期待を高める実践例

アンケートで小6が中学校生活について聞きたいことを具体的に把握した上で、小6担任と共に「入学前中学校生活ガイダンス」を組み立てた。

ア 「中学校について聞きたいことアンケート」(12月実施、児童64名、実施率96%、複数回答)

【別紙資料5】

このアンケート調査では、聞き取り調査とやや違った数字があらわれたものの、依然として部活関係の関心が高い(43名)。また学習関係(17)と並び、登下校時間(16)の質問も多く、いじめ(11)、授業・教科(6)、友人関係(4)、テスト(3)、そのほか(11)と続く。質問を一つも書かなかった児童は13名(男子10、女子3)で全体の約2割に上り、うち半数が中学校進学に不安や抵抗を示す児童であった。なお先生に聞きたいことと先輩に聞きたいことの質問内容に大きな差はなかった。

児童の質問には、「小学校と違う学校生活についての質問」(部活、登下校時間、テストなど)、「楽しい中学校生活を送るための質問」(学習方法やよりよい交友関係など)が含まれる。特に後者の回答は児童の不安解消に役立つため、中学校の教員や生徒の協力が有効であると考えられる。

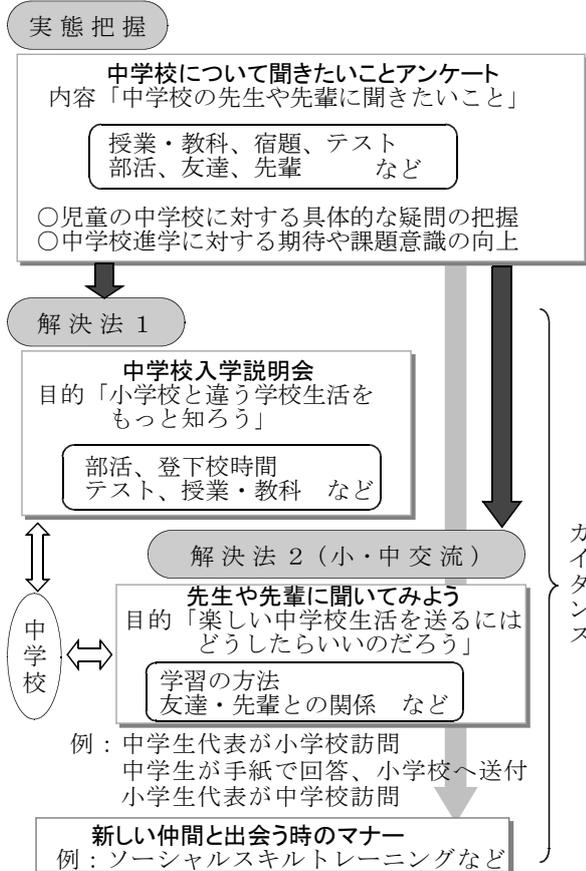
イ 「中学校説明会」の活用とその後の交流

多くの中学校では、入学予定の小6児童や保護者を対象に中学校生活についての説明会(「中学校説明会」)を開いている。児童が目的を持ってこの「中学校説明会」に参加することで「小学校と違う学校生活についての質問」の回答が得られるだけでなく、進学への期待が高まると考えられる。「中学校説明会」でも解決しなかった疑問や、「楽しい中学校生活を送るための質問」については、小・中が交流する形での解決を提案したい。そのために両校担当者が連絡・調整し合い、お互

いの事情を考慮して実施するのが望ましい。

ウ 入学前中学校生活ガイダンスの組み立て例

ねらい 児童の中学校進学に対する不安を和らげ、期待を高める。



ガイ
ダンス

(3) 「とまどいの壁」対策案

ア 実態把握 (小学校からの情報)

第1回小・中情報交換会での情報をもとに、「申し送りカード」にチェックがある生徒など新しい環境に適応しにくい生徒を関係教員で十分に把握し、重点的に見守る。

イ 重点的な対策 (『人間関係』と『学習』)

生徒は、学級では友人関係 (横つながり)、部活では先輩との上下関係 (縦つながり) の『人間関係』を新たに築かなくてはならない。人間関係づくりは教室だけでなく、部活でも必要である。

また学習についても戸惑う生徒が多いため、入学後のガイダンスで『評価・学習』について十分な支援を行う必要がある。

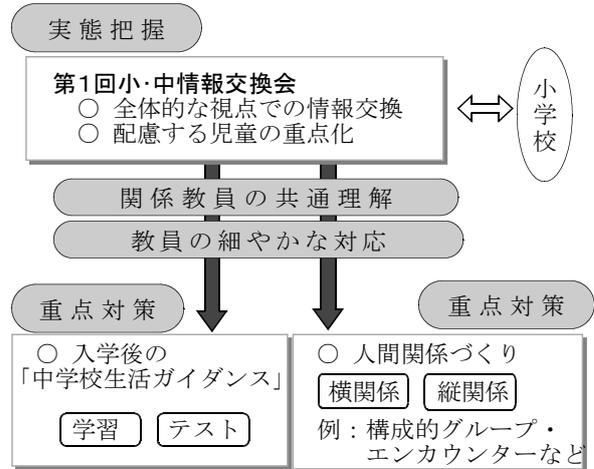
ウ 教員側の配慮

中1アンケートによると、入学直後の生徒は教員に教室の場所を教えてもらっただけでも支援を受けたと感じる。教員の細やかな対応で生徒は安心し、援助者として信頼するようになる。

エ 「とまどいの壁」対策支援案のまとめ

ねらい

適応が難しい生徒を重点的に見守りながら、新しい環境に対するとまどいを解く。



(4) 「なやみの壁」対策案

ア 実態把握 (教員の「気付き」による早期発見)

入学後しばらくすると自力解決できない悩みを抱えている生徒が出てくる場合がある。定期テストや大きな行事前後の生徒の表情や動きに注意し、特に男子は『評価・学習』、女子は学級や部活の『交友関係』に悩む場合が多いことに留意しながら早期発見に努める。悩みアンケートなどを実施する場合は、入学直後ではなく大きな行事後などに行うことが効果的であろう。

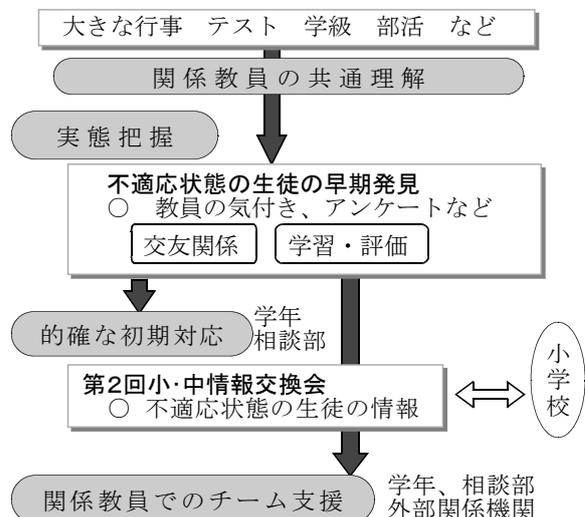
イ 第2回小・中情報交換会による情報連携

入学後不適応状態にある生徒について、現在の状態の理解に必要な家庭環境や、以前の交友関係のトラブルなどの情報交換を重点的に行う。

ウ 「なやみの壁」対策支援案のまとめ

ねらい

自力解決できない悩みを抱えている生徒を早期発見し、効果的な初期対応を行う。



6 小学校内での情報連携 【別紙資料6】

(1) 「配慮すべき児童」のとらえ方

B小学校で、各担任が各クラス5名程度「配慮すべき児童」を選び(12クラス、対象児56名)、「申し送りカード」を使って客観的に表現する『児童理解に関する研修』を行った。担任の選定の視点は「学力」(18名)、「交友関係」(15)、「家庭環境」(15)、「欠席日数」(12)などが多く、小学校の家庭環境重視の傾向はここでも見られた。

またカード項目①～⑤のいずれかにチェックがある児童は対象児の約93%であり、「申し送りカード」は広く生徒指導上の資料としても活用できそうであることが分かった。

(2) 新しい学年への支援のために伝えること

児童は日々成長している。新担任が次の段階に進む児童の支援にかかわっていくために最も必要なのは「児童の現在の姿」(実態)である。また旧担任が必要に応じて指導過程や児童の背景(家庭環境など)の情報を提供することで、新担任はその後の新たな問題行動に的確な対応ができることが多い。これは小・中の情報連携と同様である。

新担任の新しい指導を支えるために、指導過程や家庭環境を重視しながらも「児童の現在の姿」を客観的にとらえ、共通のイメージをもって引継ぎをすることが求められる。

VII まとめと今後の課題

1 まとめ

協力学校の小6と中1及び県内小・中教員に対し、聞き取り調査やアンケート調査を実施した。これらの調査により、児童生徒から見た小・中の違いや児童生徒を支える小・中教員の児童生徒観の違い、及び小・中情報交換会の実態を把握した。さらにそれに基づいて、実態に合った中1適応支援を考えた。

- 教員アンケート調査からは、小・中教員の重視する情報の違いや、現在の小・中情報交換会のもち方の改善すべき方向が示された。また、小6聞き取り調査及び中1アンケート調査からは既に小6時から中学校生活に不安を感じる「不安の壁」、中学校入学直後には小・中の違いに直面した驚きからくる「とまどいの壁」、入学後しばらくして自力で解決できない事態になった時の「なやみの壁」というべき「心理的な3つの壁」があるのではないかという気付き

を得ることができた。多くの児童生徒はこれらの壁を自然に乗り越えていくが、克服できずに不適応を感じる生徒にとっては、これらの「心理的な3つの壁」それぞれが不登校のきっかけになり得ると思われる。合わせて『評価・学習』『交友関係』は中学校における大きな課題であることも示され、いわゆる「中1不登校」をもたらすものの一面が明らかになったと考える。

- 児童生徒の心理状態が時間の経過と共に変化していく実態から、中学校適応支援は、全体的な視点及び個の視点で小・中それぞれで行われる必要がある。そこで不登校を始めとする学校不適応生徒の早期発見と効果的な初期対応のために、小学校時の蓄積された情報を中学校側が活用する「申し送りカード」や、効果的な小・中情報交換会のもち方について提案した。
- 「心理的な3つの壁」支援を、小・中が連携して行うモデル案を提案した。特に中学校適応支援を小6から行う支援については、協力小学校の6年担任と共に、小・中交流を含む形での具体的な支援策の組み立てを行い、実践例を提示できた。

2 今後の課題

今後の課題として、以下のことがあげられる。

- 「とまどいの壁」「なやみの壁」を乗り越えるための支援案を中学校の教員と共に具体的な支援に組み立てること、また「申し送りカード」を活用した小・中情報交換会から得られた情報を生徒の支援に生かす実践が必要である。
- 児童生徒にとって中学校進学は、温かく保護されていた児童期から歩み出て自立していくために通過しなければならない段階である。児童生徒が新しい環境に対する不安や戸惑いを克服する方法を学ぶことは、その後の進路や生き方そのものに生かされていくと考える。我々教員は児童生徒の発達課題についてもう一度考え、乗り越えるための支援を行う必要がある。

(主な参考文献)

- ・ 国立教育政策研究所生徒指導研究センター『中1不登校生徒調査(中間報告)』(2003)
- ・ 石川 瞭子 著『不登校から脱出する方法』青弓社(2002)

(担当指導主事 井上 淑人)